

よろずは

平成二七年
二月号

タイトルの「よろずは」は、「万葉」を訓読みしたものです

万葉文化館 おすすめ万葉歌

梅柳 過ぐらく惜しも

佐保の内に 遊ばむことを

宮もとどろに

万葉集 卷六―九四九 作者未詳

【意識】

梅や柳の盛りの時期が過ぎるのが惜しいなあ。佐保の内で遊ぶはずだったのに、大宮もとどろく大事件になっちゃった。

この歌は、長歌（九四八番歌）と一組になっています。長歌では、春日山に春がやってきて高円の野にウグイスが鳴き出したので、友人と馬をつらねて遊びに行きたかったなあ、などと詠んでいます。この歌にもあるとおり、待ち遠しく思っていた春がせつかくやってきたのにある理由で遊びに行けなくなっただけのことのようですが、いったい何があったのでしょうか。

これらの歌にはその「事件」について説明した注があります。それによると、神亀四年（七二七）正月に、多くの皇子や廷臣たちが春日野に集まって打毬の遊びをしていたら、とつぜん空が曇り雨が降り出して雷が鳴り稲妻が走った。天皇の警護をすべきところ宮中には侍従も侍衛もいなかったの、彼らに罰を与えて授刀寮から外出を禁じた。時に人々がこの歌を作った、とあります。現代でも、大地震などの災害時には公務員はただちに勤務地に集合することになっていますが、古代には「雷」でもその必要があったようです。

【万葉古代学係】